精神疾患患者の外泊における家族支援について

ー困ったときの対応マニュアルを作成してー

D病棟
○福　地　章　浩　　川　末　孝　治
中　西　久仁子　　吉　長　三樹子

Ⅰ.はじめに

精神科の患者にとって外泊は家族との生活や周囲の環境に慣れていくために必要不可欠である。外泊は退院及び社会復帰につながるという意味においては非常に重要な意味を持つ。2006年の研究で当科入院中の外泊患者の家族X名に対して外泊時における家族の関わりを調査した。その結果、家族は患者にごく普通の日常生活を送ってほしいと望んでいること、そのために、患者がどの程度の日常生活が可能であるのかを知りたいと思っていることが明らかになっている。また外泊中の患者の精神症状への対応についてや、患者にとってプラスになる関わり方について教えてほしいという要望も見られる。

そこで、今回、前回の知見にもとずいて家族が外泊中の患者と上手くコミュニケーションがはかれるよう家族の負担を少しでも軽減することを目的に、困ったときの対応マニュアルを作成し、初回外泊をする患者の家族に実際に使用し、アンケート調査を実施した。

Ⅱ.研究方法と対象

研究期間：2007年8月1日～10月10日

研究対象：当精神科病棟に入院中で初回外泊をする患者の家族X名を対象とした。

研究方法：アンケート結果より外泊中に問題となっている内容をいくつかのカテゴリーに分類した。その結果、服薬・睡眠・食事・コミュニケーション・精神症状・活動の6項目に分類し、それぞれに困ったことへの具体的な対応策を考えた。

次にマニュアルを作成するにあたり、何パターンかを作り、家族がさっと目を通せるよう、マニュアル用紙の枚数・文字サイズ・行間・身近に感じられるよう絵を挿入するなどの工夫をした。特に高齢の家族もいるので、各項目が一目でわかるよう目次とページ数を大きく表示した。さらに、病棟スタッフへも意見を求めてマニュアルを修正した。

また外泊前の患者の入院生活状況がわかるように現在の患者の状態を受け持ち看護師が記入する用紙も作成した。睡眠・服薬・食事・精神症状・日中の過ごし方の5項目について記述し患者の状態をより理解できるようにした。

またこのマニュアルを実際に使用してみた結果はどうであったかを家族の方にアンケートに協力をしてもらい感想などいくつかの質問を実施した。

これらの用紙を通常の外泊連絡用紙とともに手渡し、研究調査を実施することの説明を行った。

Ⅲ.倫理的配慮

マニュアルを作成するにあたり、実施施設での承認を受けた後、家族に手渡す際に研究調査の目的・方法を説明した。また、本研究以外には使用せず、プライバシーを保護すること、マニュアルやアンケートの使用は自由であること、マニュアルの使用やアンケート回答の結果に関わらず患者の療養生活に不利益は生じない旨を説明し、家族の同意と協力を得た。

Ⅳ.結果

今回のアンケート配布数8名中、回収数は6名（75%）で有効回答として分析した。

アンケートを回収できなかった2件は、外泊中に精神状態が著しく悪化し、外泊中止を余儀なくされた例と、普段あまり接点のない親戚のところに外泊したためにマニュアルを使用しなかった例であっ

た（**図1**）。

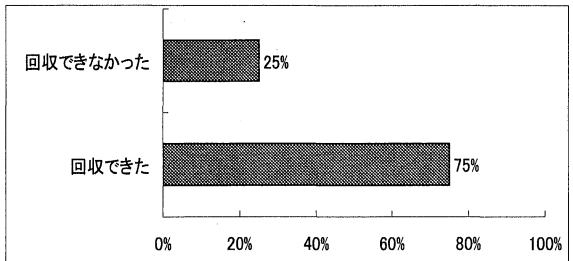

図1 アンケートの回収の有無

「マニュアルを読んだか」は1）「全部読んでみた」は6件（100%）、2）「気になる項目だけを読んだ」が0件（0%）、3）「特に読まなかった」は0件（0%）であり、外泊される家族として6名全員が困ったときの対応マニュアルの全てに目を通していた（**図2**）。

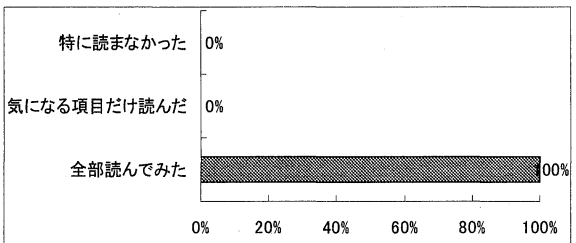

図2 マニュアルを読まれましたか？

「マニュアルが参考になったか」は1）「マニュアルが大変参考になった」が3件（50%）、2）「マニュアルが少し参考になった」が3件（50%）、3）「マニュアルがほとんど参考にならなかった」が0件（0%）であった（**図3**）。

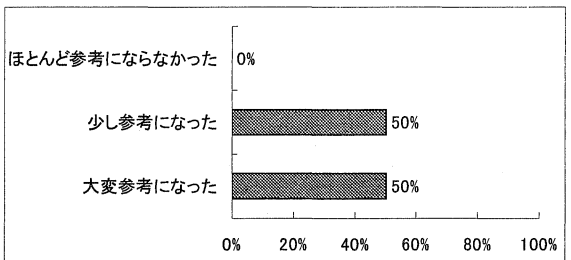

図3 マニュアルが参考になりましたか？

「実際に困った時、参考になることがマニュアルに載っていたか」は1）「マニュアルに載っていた」が3件（50%）、2）「マニュアルに載っていなかった」が1件（17%）、3）「特に困ったことがなかった」が2件（33%）であった（**図4**）。

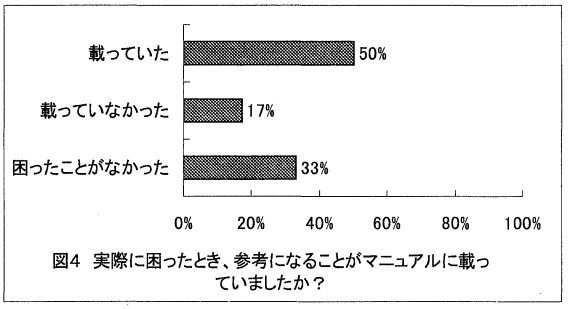

図4 実際に困ったとき、参考になることがマニュアルに載っていましたか？

また、「このようなマニュアルが必要だと思う」が5件（83%）、2）「必要ないと思う」が0件（0%）、3）「必要だが、マニュアルの改良が必要だと思う」が1件（17%）であり、全患者の家族が必要と回答した（**図5**）。

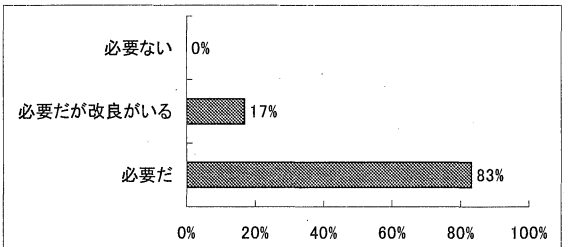

図5 このようなマニュアルが必要だと思いますか？

最後に家族の方に自由記載してもらう欄には「病院でどう過ごしているのかよくわかりありがとうございました」「このパンフレットがなかったら外泊は成功しなかった」などの意見がみられた。その反面、「咄嗟の判断ではマニュアルどおりにはいかない」という回答もみられた。

また外泊前の患者の入院生活状況がわかるように現在の患者の状態を記入する用紙に関しては、「単純に記述するのではなく、もっと具体的な状態を聞かせてほしい」との意見もあった。

Ⅴ.考察

回収したアンケートの結果については、マニュアルは、全ての人が目を通していることから、患者の家族はマニュアルに興味を持っているものと考える。そして程度の差はあるもののマニュアルは外泊中の困ったときに、参考になっていることが分かった。しかし、その反面、マニュアルに載っていないことで対応に困ったという家族もあり、今後、マニュアルの改善が必要であるともいえる。しかしながら、すべての患者に対応したマニュアルを作成すること

は難しく、マニュアルだけの対応にも限界があると思われる。マニュアル以外で面談などを効果的に活用していく必要がある。

次にアンケートの自由記載欄には、患者の病棟生活がよくわかったという意見の反面、咄嗟の判断では対処できないという意見もあり、マニュアルに掲載している、していないに関わらず患者の急変には対処できない場合も考えられる。

そして、患者の状態を記入する用紙には、「もっと具体的な記述が必要である」との意見から患者の家族がわかりやすいようにより具体的に記載する必要がある。例えば、他の患者と会話をしているだけではなく、表情や言動などを付け加える必要がある。患者の状態を具体的に記載できなかったのは、スタッフへの詳細な病棟生活での記載の必要性を十分説明できなかったことが原因であり、今後の反省点である。さらには、今後マニュアルを手渡すだけでなく家族との面談も必要である。

江坂らは、「外泊は病院内外での生活を支える看護者の主体性が必要である[1)]」と述べている。また、玉井らは、「家族と関わりをもつ場面で、看護者が患者との対応方法などのモデルの役割を意図的に果たしていく必要がある[2)]」とも述べている。スタッフはこれまで外泊中の出来事について、関心はあるものの深く関わることができず、家族より帰棟時に報告を受けるだけだった。これからは初回外泊を成功させる意味においても家族に任せきりにせず、これまで以上に看護者の積極的な関わりが大切である。

さらに、田上らは、「病院での現在の様子や症状、何ができて何が出来ないのか、などについても説明は必要である[3)]」と述べている。つまり、病院での患者の状態をわかりやすく記入し、外泊の出発前に手渡すことによって、家族は外泊する患者の状態を把握することができる。そして、家族の不安の軽減にもつながり、結果的に患者の自信にもつながる大切な関わりである。また、初回外泊で失敗すると、今後の治療にかなりの悪影響を及ぼし、逆に初回外泊で成功すれば、すぐに次の外泊につながり、退院も視野に入ってくる。つまり、初回外泊時にマニュアルを使用することで、外泊がうまくいけば、今後の治療もスムーズに行え、次の外泊も本人・家族共に自信をもって臨むことができる。

アンケートを配布した8件中回収できなかった2件については、病棟内では精神状態が落ち着いていたが外泊すると外部環境に適応できず状態が悪化、外泊中止となったことから、普段の入院生活の状態を見極めることは非常に難しいものだと思われる。そして普段接点のない外泊先に行かれてマニュアルを使用されなかったことは、患者と家族との親密さが少なかったことが回収できなかった大きな要因だと考える。

以上の考察より、私たちはマニュアルを使用することにより、また、外泊前の患者の状態を知ることにより、家族が少しでも安心感を得、負担を軽減できたことにより、外泊への協力が得られ、退院そして社会復帰に向けて働きかけるきっかけになったと考える。

Ⅵ. 結論

1. マニュアルは初回外泊を行う患者の家族に対し有効であった。
2. 今後、より多くの患者の家族に利用できるようマニュアルの改良をしていく必要がある。
3. 患者の現在の状態を記入するときは、家族にわかりやすいように具体的に記載するようスタッフへの意識付けが大切である。
4. マニュアルを使用することで家族の安心感が得られると共に患者の自信にもつながる。
5. スタッフはこれまで以上により具体的に外泊に関わっていく必要がある。

【引用文献】

1）江坂千寿子：研究報告 ,P45 ～ 52, 精神科看護 ,2001.
2）玉井恵美子：看護研究報告集 45 巻、p 67 ～ 72, 精神看護出版，1994
3）田上美千佳：家族にもケア，P100，精神看護出版，第 1 版，2004

【参考文献】

1）川野雅資：精神障害者のクリニカルケア p67 メジカルフレンド社，第 1 版、1999.
2）野田敦子：精神分裂病患者の予後と家族関係―

入院中の面会・外泊・面談等の家族の関わりからの一考察　37巻，p478～480，日本精神科看護学会誌，1994
3）中村利江子：患者用外泊用紙を活用した社会復帰に対する問題点の抽出，p106～108，第34回地域看護，2003